

令和 6 年 5 月 24 日現在

機関番号：32621

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2023

課題番号：18K02461

研究課題名(和文) 子どもの認知プロセス—環境要因を考慮した親・保育者・一般成人の比較

研究課題名(英文) Cognitive processes for children: Comparison of parents, childcare workers, and general adults considering environmental factors

研究代表者

齋藤 慈子 (Atsuko, SAITO)

上智大学・総合人間科学部・准教授

研究者番号：00415572

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：社会の中での子育てを促進することを目指し、以下の3つの研究を行った。(1)乳幼児顔に対する評定を母親と大学生で比較した結果、両者では乳幼児の顔の認知が異なることが示唆された。(2)親でもある保育士へ保育と子育ての相違についてインタビューを行った結果、共通点として子どもに対するポジティブ感情などが、相違点として対象が集団であるか否かなどが見いだされた。(3)3-5歳児を育てる母親と父親において、ソーシャルサポートが親の心理的状态、養育行動を介して、あるいは直接、子どもの発達に影響を与えるのかをオンライン調査データにて検討したところ、母親と父親では要因感の関連の仕方が異なることが示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の結果から、親と大学生で乳幼児の顔の認知の仕方が異なること、子どもと積極的にかかわる仕事である保育者であっても、子育てと保育は同じではないこと、養育におけるソーシャルサポートの影響の在り方は、母親と父親で異なることが示された。どのような人が、どのような年齢の子どもに、どのようにかかわりうるのか、またその影響の在り方に関する情報を提供することができ、これらの情報は、社会の中での子育てを促進するためのシステム構築のヒントとなると考えられる。

研究成果の概要(英文)：To promote child-rearing within society, we conducted the following three studies: (1) A comparison of ratings of infant faces between mothers and university students suggested differences in infant face recognition between the two groups. (2) Interviews with childcare workers who were also parents revealed that while positive emotions towards children were a commonality, differences included whether the focus was on an individual or a group. (3) An online survey of mothers and fathers raising children aged 3-5 examined whether social support affects child development either directly or through the parents' psychological states and parenting behaviors. The results suggested that the way these factors are related differs between mothers and fathers.

研究分野：発達心理学

キーワード：子育て

1. 研究開始当初の背景

核家族化、育児の孤立化が問題とされる中、地域社会を含め、様々な人が子育てにかかわることの重要性が指摘されて久しい。母親だけでなく、様々な人が子どもとかかわることは、ヒトが手のかかる子を同時に複数育てるといった特徴をもっていることから、共同繁殖をする種であることを考えれば、当然のことといえる。しかし、実際は「ワンオペ育児」という言葉が流行したり、保育所の騒音が問題になったりと、社会での子育ては理想でありつつも、現実はそのからかけ離れている。

社会の中の子育てを実現するには、かつては一般的であった「子どもは社会の宝」「子どもはかわいいもの、世話したく(かかわりたく)なるもの」という認識を、親以外の人に共有してもらう必要があるであろう。しかし、先の保育所騒音問題等をみても、そのような認識が万人に共有されていないのは明らかである。極端な場合、子育てをするのが当然と一般的には考えられる実の母親であっても、虐待を行うケースはある。

生物学的な観点からすると、万人が子どもをかわいい、かかわりたいと思わないのは当然のこととも考えられる。生物個体は生きてから死ぬまでの一生の中で、適応度(残す子の数)を最大化するために、限られた資源である時間とエネルギーをどのように分配するかのトレードオフに対処する。このことを生活史戦略という。自身の成長や配偶に投資すべき時期の人にとっては、子どもの世話に時間やエネルギーを投資することは難しい。また、生活史戦略には個人差があり、子どもに対する投資を行うタイミング、投資量は各個人の特性、状況によって異なる。母親であっても、状況がよくない場合は育児放棄という行動の選択肢もありうる。

一方で、出産の経験という生理学的準備性を備えずかつ、進化的な共同繁殖のメンバー(血縁者や生活空間を共有するような人)とはいえないにもかかわらず、積極的に子どもとかかわりを持っているのが、保育者(保育士・幼稚園教諭)である。保育者の子どもへのかかわりについて理解することは、生物学的に親ではない人が子どもにかかわるうえでのヒントを提供してくれるであろう。

2. 研究の目的

子どもに対する認知、かかわりたいという欲求、かかわり方とそれらに影響を与える環境要因について、立場(親、一般大学生、保育・教育に携わりたいことを希望する大学生、保育者)の違いや、対象となる子どもの月齢・年齢の違いについて検討し、社会の中の子育てを促進するためのシステムや施設の構築に有益な情報を提供する。

(1) 乳幼児顔の評定：親、一般大学生、教育学部大学生の比較

子どもの顔に対する、かわいさ、養育欲求、接近欲求の評定が、子どもの月齢によってどのように変化するのか、また、評定者の立場・条件(母親とそうでない成人)によって異なるのかを検討する。

(2) 親でもある保育士へのインタビュー

保育と親の子育ての認識に違いがあるのか、あるとしたらどのような点で異なるのかを、自身が親として子育てもしている保育士の語りから明らかにする。

(3) 3-5歳児を持つ母親と父親へのオンライン調査データ分析

3-5歳児を育てる母親と父親において、子育てに影響を与える環境の一つである配偶者や親以外のソーシャルサポートが、親の心理的状態、養育行動を介して、あるいは直接、子どもの発達に影響を与えるのかを検討する。

3. 研究の方法

(1) 乳幼児顔の評定：親、一般大学生、教育学部大学生の比較

母親群として、0-2歳の子がいる母親89名(平均年齢 35.02 ± 4.03 歳、平均子数 1.69 ± 0.88 人、末子平均月齢 16.19 か ± 7.48 月)、教育学部生群として、保育士・幼稚園教諭、小学校教諭養成学科所属の大学生155名(女性117名、平均年齢 18.77 ± 0.55 歳)、一般学生群として上記学科ではない大学生108名(女性83名、平均年齢 20.41 ± 1.50 歳)を対象に、乳幼児顔を提示し、それぞれの写真について評定をさせるオンライン調査を実施した。刺激は乳幼児8名(男児4名、女児4名)の正面向き、無表情の顔写真であった。各児につき、新生児期(0か月)、1-3ヶ月、4-7ヶ月、8-11ヶ月、12-18ヶ月、19-24ヶ月の6枚、合計48枚を用いた。各写真について、「かわいいと思いますか」(Cute: かわいさ)、「ごはん(ミルク)をあげたいと思いますか」(Feed: 養育欲求)、「抱きしめたいと思いますか」(Hold: 接近欲求)について、5件法(1:まったくそう思わない~5:非常にそう思う)で回答を求めた。

(2) 親でもある保育士へのインタビュー

30-60代の保育所で保育士として働いており、かつ子育て経験のある母親8名を対象に、保育をしていて大変なこと、嬉しい・楽しいと感じること、子育てをしていて大変なこと、嬉しい・楽しいと感じること、保育と自身の子育ての違いは何かを聞く、半構造化インタビューを行った。語りは逐語録化し、KJ法を参考に、保育士の仕事、親としての子育ての内容を、それぞれカテゴリーとしてまとめた。

(3) 3-5歳児を持つ夫婦へのオンライン調査データ分析

少なくとも1人の3-5歳児と生活している母親とその父親618組を対象に、調査会社(マクロミル <https://monitor.macromill.com/>)を通してオンライン調査を実施した。不適切と考えられた回答者を除き、分析対象となったのは523組(母親:平均年齢 35.06 ± 4.88 歳、父親:平均年齢 37.03 ± 5.61 歳、回答対象児:平均年齢 4.53 ± 0.88 歳、男児250名、女児273名)であった。

分析対象とした調査項目は、養育におけるサポート(配偶者の育児参加、祖父母からのサポート、非血縁者からのサポート、独自に項目を作成)、子どもの社会的発達(向社会的行動と問題行動:SDQ¹)、親の精神的健康(育児ストレス:PSIのParental Distress²、抑うつ:BDI-II³)、養育行動(温かい態度:PBIのCare⁴、虐待⁵)であった。統制変数として、世帯収入、回答者の学歴、就業状況、年齢、子の年齢、性別、きょうだいの数を用いて、母親と父親それぞれのデータでパス解析を実施した。

4. 研究成果

(1) 乳幼児顔の評定:親、一般大学生、教育学部大学生の比較

母親群については、かわいさ評定値は、4-7か月齢の刺激にピークが見られるものの0か月から18か月頃までの刺激について同程度で、19か月以降で低下が見られた。養育欲求と接近欲求の評定値については、評定値の低下がより早期に生じ、かつ4-7か月のピークも不明瞭であった。このことから、かわいさの知覚と

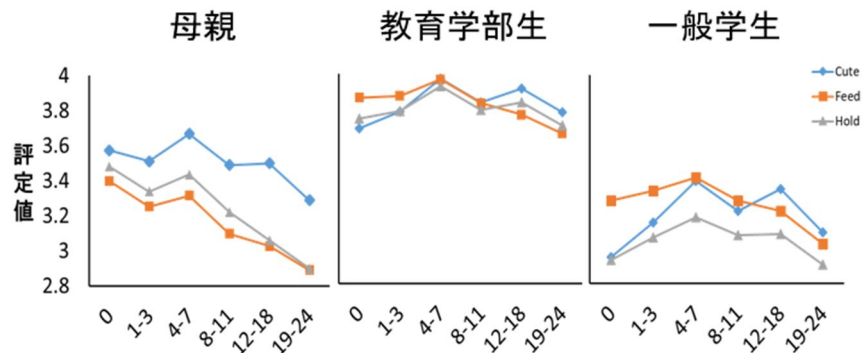


図1. 各群における評定値の刺激月齢による変化

養育欲求、接近欲求は必ずしも一致しないことが示唆された。大学生については、教育学部生群の評定値が非常に高いが、教育学部生群、一般学生群の評定の傾向は類似していた。かわいさ、養育欲求、接近欲求それぞれの評定値は、4-7か月の刺激にピークが見られ、母親と大学生で乳幼児の顔の認知が異なる可能性が示された。これらの結果から、低月齢児をもつ母親と大学生では、乳幼児の顔の認知が異なることが示唆された(図1)。

(2) 親でもある保育士へのインタビュー

保育と子育ての共通点として、子どもの発達と子どもに対するポジティブ感情、子ども、周囲の人との関係性構築などのカテゴリーが見いだされた。相違点としては、対象である子どもが集団であるか否か、責任の範囲が見いだされ、子育てと保育が質的に異なることが明確に示された。

(3) 3-5歳児を持つ夫婦へのオンライン調査データ分析

サポートが多いと子の向社会的行動が増え、問題行動が減るといった、子どもの発達がよくなるという直接的な効果は見られず、予測とは異なり、母親では配偶者(夫)の育児参加が高いと、子の問題行動が高くなり、父親では非血縁者からのサポートが高いと子の問題行動が高くなるという関連が見られた。また、親の状態や養育行動は、サポートと子の発達の関連を媒介しているという結果が得られた。例えば、母親では、非血縁者からのサポートが高いと、育児ストレスが低下し、育児ストレスの低下は、養育の温かさを高めて、子の向社会的行動を高めるといったパスが、父親では、母親の育児参加が高いほど、虐待が低くなり、子の問題行動が低下するというパスが見られた。母親と父親では要因感の関連の仕方が異なることも示唆され、両者を取り巻く社会環境やサポートへのアクセスのしやすさに違いがあることが考えられた(図2, 3)。

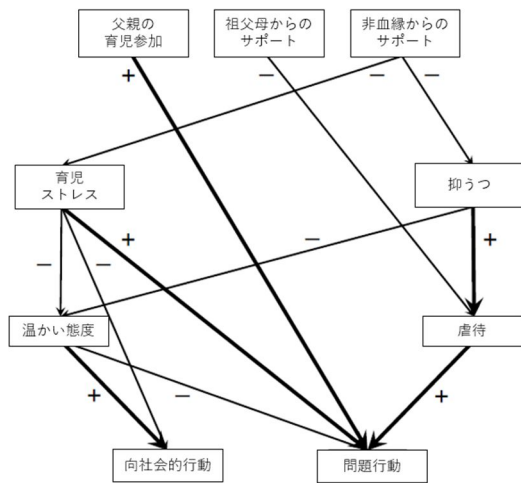


図 2 . 母親のパス解析の結果

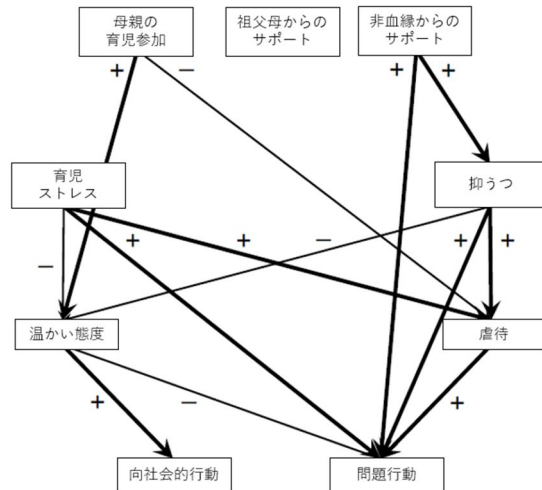


図 3 . 父親のパス解析の結果

< 引用文献 >

1. Matsuishi, T., Nagano, M., Araki, Y., Tanaka, Y., Iwasaki, M., Yamashita, Y., ... & Kakuma, T. (2008). Scale properties of the Japanese version of the Strengths and Difficulties Questionnaire (SDQ): a study of infant and school children in community samples. *Brain and Development*, 30, 410-415.
2. 兼松 百合子・荒木 暁子・奈良間 美保・白畑 範子・丸 光恵・荒屋敷 亮子 (2006). PSI 育児ストレスインデックスマニュアル (第2版) 雇用問題研究会
3. Kojima, M., Furukawa, T. A., Takahashi, H., Kawai, M., Nagaya, T., & Tokudome, S. (2002). Cross-cultural validation of the Beck Depression Inventory-II in Japan. *Psychiatry research*, 110, 291-299.
4. 菅原 ますみ・八木下 暁子・詫摩 紀子・小泉 智恵・瀬地山 葉矢・菅原 健介・北村 俊則 (2002). 夫婦関係と児童期の子どもの抑うつ傾向との関連 家族機能および両親の養育態度を媒介として *教育心理学研究*, 50, 129-140.
5. 花田 裕子・小西 美智子 (2003). 母親の養育態度における潜在的虐待リスクスクリーニング質問紙の信頼性と妥当性の検討. *広島大学保健学ジャーナル*, 3, 55-62.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計11件（うち査読付論文 10件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 4件）

| | |
|--|---------------------|
| 1. 著者名 野寄茉莉、齋藤慈子 | 4. 巻 23 |
| 2. 論文標題 日本語版養育スタイル尺度の作成と信頼性・妥当性の検討 | 5. 発行年 2022年 |
| 3. 雑誌名 チャイルド・サイエンス | 6. 最初と最後の頁 35-39 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|-----------------|
| 1. 著者名 Morita Masahito, Saito Atsuko, Nozaki Mari, Ihara Yasuo | 4. 巻 - |
| 2. 論文標題 Childcare support and child social development in Japan: investigating the mediating role of parental psychological condition and parenting style | 5. 発行年 2021年 |
| 3. 雑誌名 Philosophical Transaction B | 6. 最初と最後の頁 - |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.6084/m9.figshare.c.5355022 | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

〔学会発表〕 計29件（うち招待講演 6件 / うち国際学会 2件）

| |
|---|
| 1. 発表者名 齋藤慈子 |
| 2. 発表標題 ヒトの子育て・子育てを考える |
| 3. 学会等名 第48回静岡小児臨床研究ネットワーク勉強会 特別講演（招待講演） |
| 4. 発表年 2022年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 齋藤慈子 |
| 2. 発表標題 『赤ちゃんはかわいい！』は本当か？ - 子どもの認知を左右する要因 |
| 3. 学会等名 土曜研 公益社団法人日本心理学会 発達心理学基礎研究検討会（招待講演） |
| 4. 発表年 2021年 |

| |
|------------------------------------|
| 1. 発表者名 齋藤慈子 |
| 2. 発表標題 ヒトの子育てを考える |
| 3. 学会等名 相模女子大学人間心理学科主催講演会（招待講演） |
| 4. 発表年 2021年 |

| |
|--------------------------------------|
| 1. 発表者名 齋藤慈子、厚澤祐太郎、吉田明尚、角田梨央 |
| 2. 発表標題 保育と子育ての違い 保育士として働く母親の語りから |
| 3. 学会等名 日本心理学会第85回大会 |
| 4. 発表年 2021年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 Morita Masahito, Saito Atsuko, Nozaki Mari, Ihara Yasuo |
| 2. 発表標題 Parental psychological condition and parenting behaviour mediate the associations between childcare support and child social development in Japan. |
| 3. 学会等名 European Human Behaviour and Evolution Association. (国際学会) |
| 4. 発表年 2021年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 森田理仁、齋藤慈子、野崎茉莉、井原泰雄 |
| 2. 発表標題 親の精神的健康と養育行動は、子育てへのサポートと子どもの社会的発達に関連を媒介するか？ 共同繁殖の視点から |
| 3. 学会等名 日本人間行動進化学会第13回大会 |
| 4. 発表年 2020年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 森田理仁、齋藤慈子、野崎茉莉、井原泰雄 |
| 2. 発表標題 現代社会とヒトの共同繁殖 子育てサポート・親の健康・養育行動・子の発達 |
| 3. 学会等名 動物行動学会第39回大会 |
| 4. 発表年 2020年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 齋藤慈子、野崎茉莉、森田理仁、井原泰雄 |
| 2. 発表標題 3-5歳児を持つ母親と父親の育児におけるソーシャルサポートと精神的健康 |
| 3. 学会等名 日本心理学会第84回大会 |
| 4. 発表年 2020年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 厚澤祐太郎・齋藤慈子 |
| 2. 発表標題 保育士の仕事と親の子育ては何が違うのか 保育士として働く母親の語りから |
| 3. 学会等名 日本発達心理学会第31回大会 |
| 4. 発表年 2020年 |

| |
|---------------------------|
| 1. 発表者名 齋藤慈子 |
| 2. 発表標題 子育ての正解は一つじゃない |
| 3. 学会等名 日本発達心理学会第31回大会 |
| 4. 発表年 2020年 |

| |
|---------------------------|
| 1. 発表者名 齋藤慈子・橋彌和秀 |
| 2. 発表標題 「かわいい」の進化と文化 |
| 3. 学会等名 日本発達心理学会第30回大会 |
| 4. 発表年 2019年 |

〔図書〕 計3件

| | |
|------------------------------|-----------------|
| 1. 著者名 齋藤慈子・平石界・久世濃子 | 4. 発行年 2019年 |
| 2. 出版社 東京大学出版会 | 5. 総ページ数 336 |
| 3. 書名 正解は一つじゃない 子育てする動物たち | |

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

| | 氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号) | 所属研究機関・部局・職 (機関番号) | 備考 |
|-------|---|-------------------------------------|----|
| 研究分担者 | 橋弥 和秀 (HASHIYA Kazuhide) (20324593) | 九州大学・人間環境学研究院・教授 (17102) | |
| 研究分担者 | 池田 功毅 (IKEDA Koki) (20709240) | 明治学院大学・経済学部・研究員 (32683) | |

| | 氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号) | 所属研究機関・部局・職 (機関番号) | 備考 |
|-------|---|--|----|
| 連携研究者 | 小林 洋美 (KOBAYASHI Hiromi) (30464390) | 九州大学・人間・環境学研究科(研究院)・学術協力研究員 (17102) | |

6. 研究組織（つづき）

| | 氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号) | 所属研究機関・部局・職 (機関番号) | 備考 |
|-------|---|--------------------------------------|----|
| 連携研究者 | 箕輪 潤子 (MINOWA Junko) (00458663) | 武蔵野大学・教育学部・教授 (32680) | |

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

| 共同研究相手国 | 相手方研究機関 |
|---------|---------|
| | |